

坂本龍一、いとうせいこうも注目する
ダム問題に揺れる小さな里山の暮らしを描いた
ドキュメンタリー映画 『ほたるの川のまもりびと』
ついに東京公開！

「里山での人間らしい生活を喜びとともに淡々と描き、

しかしその奥底に破壊への怒りを秘めている」 いとうせいこう（寄稿文より）

平素よりお世話になっております。映画「ほたるの川のまもりびと」が **2018年7月7日(土)より渋谷ユーロスペースほか全国順次公開が決定しました**ので、ご案内致します。貴メディアでご紹介いただきますようお願い致します。

■作品概要

現地長崎県でもあまり知られていない「石木ダム」計画。現地、川原（こうばる）の人々はこの大きな力にあらがって約半世紀もの間、たたかい続けて来た。かつて同じ地域に暮らしていた人々の一部は説得され、補償金をもらって地域から去って行った。今、残っているのは13世帯54人あまり。虚空蔵（こくうぞう）岳を望む川原は今では非常に貴重になった美しい里山。四季折々に変化する自然の中でダム反対の活動は川原の人々の生活の中に溶け込んでしまった。夜中に異音がすれば飛び起きて確認に行き、暑かろうが寒かろうが毎朝工事予定地の前でバリケードを作り座り込む。それもこれもただただ普通に暮らしたいという思いだけ。ダムは利水・治水が目的だというのがその根拠はすでに専門家によって大きなクエスチョンマークを突きつけられている。この映画は単にダムに反対する映画ではなく、私たちに普通に暮らすとは、ダム計画の当事者とは誰だろうか、というような素朴な疑問を優しく差し出してくる、一緒に考えましょう、と。



■作品制作の背景

監督の山田英治は大手広告代理店で働きながらこの作品を作りました。3.11をきっかけに自らの仕事の意義を問い直し、何か社会に本来の意味で資する活動をしたいと個人でNPOを立ち上げた矢先に、この映画の現地を訪れ、映画化を決意。2年間、現地に通って本作を完成させました。山田監督にとって初めてのドキュメンタリー作品です。現地に山田監督を誘い、その背中を押したのは本作のプロデューサーでもあるPatagoniaの日本支社長、辻井隆行。この二人の出会いが映画を生み出したこととなります。

■映画を通じて石木ダムへの関心が急速に高まっています！

12月から2月にかけて特別試写会を長崎現地で開催し、45ヶ所およそ4700人を動員。3月には音楽家坂本龍一さん、津田大介さんらが現地を訪れ、トーク付試写会を実施。坂本龍一さんは「一度失われたものは二度と取り返すことができない、今、立ち止まってみんなで考えたい」と語りました。私たちは「意識の転換点」に来ているのではないだろうか。**2018年グリーンイメー国際環境映像祭、グリーンイメー賞受賞。**

プロデューサー：山田英治、辻井隆行、江口耕三 監督：山田英治 撮影：百々新 編集：豊里洋、野崎健太郎 編集監修：安岡卓治
音楽：青空 制作：NPO法人 Better than today. 2017年 / 日本 / 86分 / デジタル / 16:9 / ドキュメンタリー

patagonia KEEN GENTEMSTICK avanti inc. Bueno! Books JOYN INC. Better than today.

公式サイト：www.hotaruriver.net <https://www.facebook.com/savekobaru/> [@hotaruriver](https://twitter.com/hotaruriver)

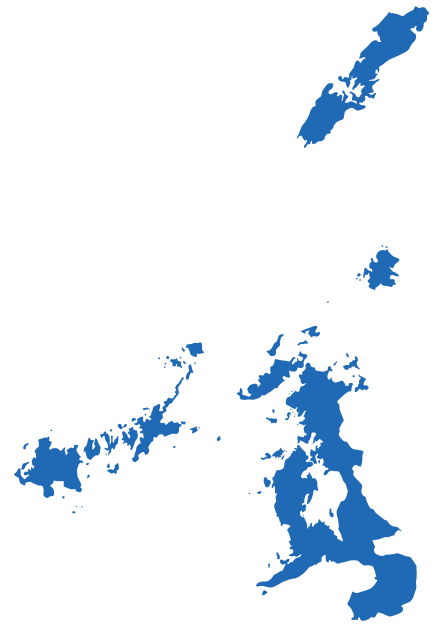
異例の先行試写会ツアーが 長崎県内で行われました！

刻一刻と進むダム計画の逼迫した状況から長崎県民の方に、
映画をいち早くご覧になっていただくために、先行試写会を催しました。
地元の有志の方々が自主的に呼びかけ、各地で開催して下さいました。

映画の完成直後の2017年11月から、18年1月にかけて（一部2月3月に実施）、
壱岐島や上五島などの島々を含め、長崎県内の8割の自治体で実施。

全45箇所、計4700人を動員しました。

試写会は回が進むにつれ、クチコミで広がっていき、
1月28日に行われた川棚公民館の上映会では、なんと700人の会場が満員に！



長崎県民もよく知らなかった石木ダム問題！

参加者に行った映画鑑賞後のアンケート調査では、「石木ダム」のことは聞いたことがあったけど、
「よく知らなかった」という感想が8割にものぼりました。（有効回答数 1000人）

坂本龍一さん「またホテルの季節に帰ってきたい」

そして、坂本龍一さん、いとうせいこうさん、津田大介さんも無償で試写会に駆けつけ、トークイベントではダム建設を巡る様々な疑問が提起され、満員の会場から多くの質問が出て、活発に意見交換が行われました。イベント当日に、坂本龍一さん、津田大介さんは、ダム予定地である川原（こうばる）に訪れ、住民の方々と交流しながらダム建設予定地を視察し、坂本さんは「未来への視点」としてダム問題を考えることの重要性を語りました。

これまで川原（こうばる）を訪れたアーティスト

- いとうせいこう
- 坂本龍一
- TOSHI-LOW
- 東田トモヒロ
- 小林武史
- 長島りかこ
- 丹下紘希
- Salyu
- Caravan
- PONDLOW

他多数

いしきをかえよう キャンペーン

もう一度立ち止まってダム計画について話し合う場を求めるキャンペーン。長崎県内を中心に広がっている。左記アーティストだけでなく、多くの著名人や文化人が参加。

<http://change-ishiki.jp/>

国家権力の元、強引に迫ってくる妥協のない自然破壊のなかで、おだやかな人間のこころそのままに里山を守ろうとする人々の淡々とした描写が美しい。決していきりたつこともなく、しかし粘り強く手をつなぎ、真剣にたたかう人間の力に感動した。

椎名誠（作家）

国や行政が一方的に決める。住民は反対する。国や行政は圧倒的な人員と機材で住民を圧倒する。例えば米軍基地。例えば原発。日本中で見かける光景だ。僕たちは弱い。国は強い。でもあきらめない。だってこんなに美しい。こんなに豊かだ。

森達也（映画監督）

心の豊かさは、その人の暮らしを取り巻く自然の豊かさだという。命をかけてまで自然を守ろうと生きるこうばるの人々こそ、静かに美しい光を放つあのホテルの群れのような。

東田トモヒロ（ミュージシャン）

中国であれば、住民が強制的に立ち退きさせられて終わりだ。民主主義国であれば、こんなに美しい暮らしが営まれる村をなくすべきなのか、国中に大議論が巻き起こるだろう。どんどん中国のようになっていくのか、民主主義国にとどまるのか、石木は日本の分岐点だ

藻谷浩介（エコノミスト）

世の中には正解がない問題だらけだ。エネルギー、外国人労働者、教育、いろんな問題にはいろんな「答え」があって、議論をすることで最適解を求めることが重要だ。石木ダムは行政と住民たちで議論に議論を重ねるべきだ。

田原総一郎（ジャーナリスト）

私たちこそが危険だと思った。

戦う人たちを勝手に「過激な人々」とイメージする私たちこそが。

この映画は見事に、50年以上もアメニモマケズ、カゼニモマケズ、戦い続けた人たちの本当の姿を描き、その力でイシキ変容させている。

丹下紘希（人間、ときどき映像作家、たまにアートディレクター）

「この映画を観ると、ただの傍観者ではいられなくなるはずだ。小さな美しい里山で起きている出来事の方行方は、その地で豊かに暮らす住民の人生だけでなく、これからの日本の民主主義の在り方も左右するからだ。より良い未来は私たちの手の内にある。まずはイシキから。」

末吉里花（一般社団法人エシカル協会代表理事）

長崎で起きていたことを、知らなかった！知れば私も、この里山を守りたい。

ここには守りたい暮らしがある。子らが小さな命と触れ合える森や川、野山。

祖父たちが耕し、米や野菜を育ててきた田畑。命育むふるさとを、奪うな！

渡辺一枝（作家）

今ここの地にダムが必要か？

今を生きる全ての人に関係する問題。未来の人に恨まれない選択のために、失われる大切な環境に今一度目を向けてみよう！

伊勢谷友介（俳優・映画監督）

ここには理不尽なダム建設計画によって故郷の土地を追われようとしている人々の戦いの日々と、ユーモアと優しさに満ちた日常と、そして彼らが愛してやまない自然との繋がりが、暖かな視線で描かれています。ぜひ個人的な視点で、つまり人間的な視点で彼らの現状を観て欲しいなと願っています。

ロバート・ハリス（DJ・作家）

ご存知でしたか？これから日本は80余のダムが建設予定だって事。

これからどんどん人口が減っていく、特に地方の人口が減っていくのに、なぜ自然を破壊していくようなダムを作るのでしょうか？一基500億として80カ所、ざっと計算しても約4兆円のお金がかかるんです。

そのお金は誰が払うのでしょうか？

そのつけを私たちの子供たちに負わせるのですか？

日本に生まれてきたら同時に多額の借金を背負ってしまう未来の子供たちをもっと思いやりましょうよ。

私たちはもっとつつましく生きていけるはずですよ。

若者が減り収入が増えないなら経費を少なくするって普通に考えられます。

誰のためのダムなのでしょう？

本当に必要なのでしょうか？

一旦決めたから実行するのではなく、今一度踏みとどまってみる勇気を持ちましょう。

この「ほたるの川のまもりびと」はそのことを考えさせてくれました。

普段の生活をもっともっと愛おしく、大切に22世紀につなげていきたい！

それにしてもおばちゃんパワー、すごいね。日本を変えるのはやはり女性であるってこと、これをしっかり受け止めました。

渡邊智恵子